Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies,
Showa Women's University, 2020, Vol. 22, 59-70.

論　文

女子大学生の友人関係と依存性が心理的適応感に与える影響

伊藤　香菜子・鵜養　啓子

Effects of friendship and dependence in female university students on their feeling of psychological adaptation

Kanako ITO and Keiko UKAI

Friendships of contemporary adolescents have been weakening. This study examined the conditions of friendship and dependence in contemporary adolescents and its effects on their feelings of psychological adaptation. In general, girls are considered to have a higher interest in friendships than boys. Therefore, a questionnaire was administered to female university students ($N = 322$). The results indicated that participants having internal relationships with their close friends and a high tendency for adaptive dependence had high feelings of psychological adaptation. On the other hand, participants having superficial relationships with their friends and a high tendency for adaptive dependence had low feelings of psychological adaptation. Moreover, the ability to maintain internal and superficial relationships and have high adaptive dependence was correlated with high psychological adaptation. The above results suggest that contemporary female university students use internal and superficial relationships depending on the person and adapt themselves to their environment. It is also suggested that the development of dependence in the direction of independence is important for adaptively developing friendships.

Key words : contemporary adolescents（現代青年）, friendship（友人関係）, dependence（依存性）
feeling of psychological adaptation（心理的適応感）

問題と目的

本研究は青年期の友人関係のあり方と適応について明らかにしようとするものである。

青年期について

青年期とは、児童期から成人期への移行の時期であり、親に依存する子どもの生き方から、自立した大人への生き方へと転換するための試行錯誤の時期である（榎本, 2012）。これを心理的離乳と呼ぶ。親から心理的離乳をして自立することが青年期の大きな課題である。そのためには、前提として親との深い信頼関係、愛情関係が必要であり、その上で友人関係が重要になってくる。親子関係が緊張した時の助けとなるのは友人であるため、友人の存在が大きくなってくる。青年期における友人は、児童期の単なる遊び友達から心の友へと変わっていく（碓井, 2000）。Ausbel (1954) は青年期における友人集団の持つ機能に、自尊心の獲得やアイデンティティの形成、心理的離乳の助長などを挙げており、青年期の友人はパーソナリティ形成やアイデンティティ確立の上で重要な影響力を有する人物であることを指摘している。このように青年期における友人関係は重要な意味があり、不可欠なものであることから、青年期の友人関係に焦点を当てていく。

青年期の友人関係について

青年期においての友人関係の機能を、松井 (1990) は3つ挙げている。第1に緊張を解消し不安を和らげ、精神安定をもたらす「安定化の機能」、第2に友人との付き合いを経て他者一般に対する相

互作用の技術を学習する「社会的スキルの学習機能」、第3に友人を発達的なモデルとみなし、新しい価値観を取り入れることにより自分自身の価値観を広げる「モデル機能」である。

従来考えられてきた青年期の友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的共鳴や同一視をもたらすような関係を特徴とする内面的友人関係（以後「内面的関係」と記す）であり、この関係により新たな自己概念を獲得し健康な成熟が促進されるとしてきた（西平，1973）。一方で、現代の青年はこのような内面的関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけあわないよう、表面的に円滑な関係を志向したりする傾向（以後「表面的関係」と記す）が指摘されている（千石，1991；栗原，1996；大平，1995など）。落合・竹中（2004）によると、現代の青年の特徴として、わずらわしい関係に巻き込まれることを恐れ友人関係に深入りしなかったり（千石・鐘ヶ江・佐藤，1987）、表面上は素直で調子が良く人当たりも良いが、自分を失ってしまうのではないかとの不安が強く、人と深く関わらなかったり（小此木，1984）といった特徴が挙げられており、現代の青年期の友人関係は、深い関わりを避けて表面的な関係にとどまる「希薄化」の状態にあることも指摘されている。

他の実証的な研究においても、現代青年は表面的関係を志向する傾向があることが見出されてきている（上野・上瀬・松井・福富，1994；岡田，1995, 1999, 2002など）。それらをふまえ岡田（2007）は、内面的関係が青年の健康な成熟と関連があるならば、それを避ける表面的関係をとる現代青年は適応の程度が低いと考え、表面的関係と内面的関係における適応指標との関連を目的とし研究を行った。その結果、内面的関係をとる青年は全体的に適応的な特徴が見られ、表面的関係を取る青年には不適応的な傾向があることを見出している。

しかし、さまざまに取り巻く人間関係の中で友人に対する関係のあり方を、内面的か表面的かのみで判断することは極端ではないだろうか。適応的であるためには、場面や相手により内面的にも表面的にも友人関係を築けることが必要なのではないかと考えられる。

依存性について

対人関係を捉える観点として「依存性」が挙げられる。依存性は未熟の象徴であり、できるだけ早く脱却することが望ましいと問題視されてくることが多かった。青年期以降を対象とした依存性の研究では、依存的な人は自信が無く、自己決定出来ないなど、その病理に注目したものが多い。DSM-Ⅴには「面倒をみてもらいたいという広範で過剰な欲求があり、そのために従属的でしがみつく行動をとり、分離に対する不安を感じる」と定義されている依存性パーソナリティ障害がある。このように、他者に依存することは一般的に問題であると考えられがちであるが、問題視されるのは適切に機能しない依存、または過度の不適応的・病的な依存性である（竹澤・小玉，2004）。

依存性の適応的意義に注目した研究はいくつかある。高橋（1968a, 1968b, 1970）は依存性を、「人間に対する関心の向け方を記述する概念であり「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義される依存要求を充足するために引き起こされる依存行動のパターンである」と定義した。つまり人間の発達の重要な側面のひとつは、依存から自立へという変化であると考えた。さらに、人間が自立を獲得・増大していく過程とは、乳幼児期から通常の人間が持つ依存要求により生起される依存行動を、年齢、能力、場などにふさわしく発達変容させていく過程のひとつであると考えた。このような考えから、依存性の発達が最終段階に達していると予想される青年女子（中学生、高校生、大学生）を対象に質問紙と文章完成法を用いて研究を行った。その結果、青年期の依存性の発達は依存対象の機能の分化、明確化、各対象に対する依存様式の変化、依存要求の強度の変化など、多様なやり方で起こっていること、青年期になって再中心化された対象に単一の焦点をもつことへ向かうことであった。この結果から、依存性とは人に普遍的なもので、発達に伴って消失するのではなく、より成熟したものに変容していくものであると述べている。

関（1982）は、人格適応面から依存性を捉え、依存性を「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義した。そして、依存性の

あり方について〈依存欲求〉〈統合された依存性〉〈依存の拒否〉の3因子を想定し、依存のあり方と自己像の肯定度によって表される適応との関連について検討した。その結果、統合された依存の高さと適応の高さに関連が見られ、依存の拒否の高さと不適応の高さに関連が見られた。また、依存欲求は単独ではなく他の2因子との関係において適応に関連することが示唆された。さらに、久米（2001）は、「友人」を依存対象として取り上げ、青年期における自己と友人への依存のあり方について自己の安定性との関連から検討しており、友人に対し適応的な依存をすると自己の安定性が高くなること、女性においては友人に対し依存欲求を有することが自己の安定性という適応的な特徴と関連すること、友人に対して依存を拒否する事は自己の安定性を低めることが示されている。

以上のことから、人間が成熟した存在であるためには依存性は不可欠なものであり、適応的に成熟するためには適応的に働く依存性が必要で、問題視されるような過度の依存、あるいは依存を全くしないことは不適応的であることが考えられる。

青年期の心理的適応感について

本研究では青年期の適応指標として「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義される「本来感」を挙げる（伊藤・小玉, 2005）。青年期はアイデンティティ形成の時期にあると言われており、本来感は精神的健康やwell-beingとの強い関連が示されていることや、自律性や可能性追求意識と正の関連（伊藤・小玉, 2006）が示されている事から、適応指標として取り上げることは有意義であることが考えられる。

そこで本研究では、現代の大学生の友人関係のあり方と依存性が心理的適応感に与える影響を検討することを目的とする。なお、男子学生より女子学生の方が友人と関わることへの意識が高いことや、一人でいる事への不安が高いこと、希薄な友人関係に悩んだり、友人関係においてありのままの自己を出せないことに悩んだりする割合が高いことから（高井, 2008）、女子学生のみを対象に本研究を行う。本研究の仮説は以下の2つを立てた。

・仮説1「内面的関係・表面的関係がともに取れて適応的な依存性の傾向が高い人は、心理的適応感を高める」

・仮説3「表面的関係のみを取り不適応的な依存性の傾向が高い人は、心理的適応感を低める」

ことが考えられる。

方　法

調査対象者と調査時期

昭和女子大学の女子大学生1～4年生の322名を調査対象とした。このうち、調査項目に回答していない回答者は分析対象外として除外した。分析対象者は300名で、平均年齢は19.43歳（SD = 1.00）であった。調査時期は2017年5月中旬から6月中旬であった。

質問紙の構成

フェイスシートにおいて学年、年齢、学部を尋ねた。また、データは統計的に処理し個人情報を保護すること、回答は強制ではないことを明記した。質問項目は全部で104項目とした。

1）友人関係

友人関係について把握するために、吉岡（2001）の友人関係測定尺度から17項目抜粋、岡田（2007）の友人関係尺度から12項目抜粋し、全29項目で構成した。回答は、「非常に当てはまる（4点）」～「全然当てはまらない（1点）」の4件法である。

親友と友人を思い浮かべてもらい、それぞれとの付き合い方について当てはまる番号を選択するよう回答を求めた。

2）依存性

依存性について把握するために、関（1982）により作成された依存性の自己評定質問紙を用いた。

「依存欲求」（13項目）、「依存の拒否」（13項目）、「統合された依存」（13項目）の3因子からなり、39項目で構成されている。回答は、「非常に当てはまる（5点）」～「全然当てはまらない（1点）」の5件法である。それぞれの項目に対して、普段どのくらいそう思うか、当てはまる番号を選択するよう求めた。

3）心理的適応感

心理的適応感について把握するために、伊藤・小玉（2005）の本来感尺度を用いた。

1因子からなり、7項目で構成されている。回

答は、「非常に当てはまる（5点）」～「全然当てはまらない（1点）」の5件法である。それぞれの項目に対して、自分自身にどの程度あてはまるか、当てはまる番号を選択するよう求めた。

手続き

調査者は調査参加者に質問紙を配布し、フェイスシートに書かれた内容を読み上げた。調査参加者に不明な点がないか確認した後、質問紙を配布し調査開始の合図をした。調査時間は10～15分程度であった。

倫理的配慮

本研究の実施に関しては、昭和女子大学の倫理委員会で承認を得た（承認番号16-52）。調査にあたっては、回答の強制はされないこと、調査結果は統計的に処理すること、調査用紙は論文執筆後シュレッダーにて速やかに処分すること等、倫理的配慮について口頭で説明を行い、調査協力者に対しては、質問紙の表紙のフェイスシートに倫理的配慮について記載し、回答をもって同意とみなした。

結　果

本研究の標本について

質問紙の表紙のフェイスシートにおいて、調査参加者に学年、年齢、学部を尋ねたが、それぞれに極端な偏りがあったため、分析には使用しなかった。

友人関係についての尺度の因子分析結果

友人関係についての尺度29項目について、親友と友人それぞれ因子分析を行った。因子負荷量の計算方法は最尤法とし、回転方法はプロマックス回転とした。

1）親友

内面的、表面的関係の側面を捉える為、2因子を想定し因子分析を行い、2因子を抽出した。しかし因子負荷量が近い2項目と、因子負荷量が.35以下の2項目があったため、それらを除いて再度因子分析を行い、最終的に25項目による2因子となった（Table 1）。

第1因子に含まれた15項目は「何でも話し合うことができる」「自分のことをよくわかってくれる」「隠し事をしなくてもよい」など、親友に対して自己を開示するような内面的な関わりについての項目であった。このことから、「内面的関係」と命名した。

第2因子に含まれた10項目は、「相手と意見が対立しないように気をつける」「楽しい雰囲気になるようにふるまう」「相手の内面に土足で踏み込まないようにする」など、親友に対して気を遣い、場を楽しませるようにふるまうような、表面的な関わりについての項目であった。このことから、「表面的関係」と命名した。

また、信頼性の検討を行うため、因子分析後にクロンバックα係数を算出した。その結果、α係数は下位尺度の「内面的関係」が.90、「表面的関係」が.80であり、内的一貫性が確認された。

2）友人

親友と同様、内面的、表面的関係の側面を捉える為、2因子を想定し因子分析を行い、2因子を抽出した。しかし、因子負荷量が.35以下の2項目があったため、それらを除いて再度因子分析を行い、最終的に27項目による2因子となった（Table 2）。

第1因子に含まれた17項目は「何でも話し合うことができる」「自分のことをよくわかってくれる」「隠し事をしなくてもよい」など、友人に対して自己を開示するような内面的な関わりについての項目であった。また、表面的関係因子の項目として想定された「あたりさわりのない会話ですませる」という項目が、因子負荷量が－で、つまり逆転項目として第1因子に含まれていた。これらのことから、親友と同様に「内面的関係」と命名した。

第2因子に含まれた10項目は、「相手と意見が対立しないように気をつける」「楽しい雰囲気になるようにふるまう」「自分の内面に踏み込まれないように気をつける」など、友人に対して気を遣ったり、場を楽しませるようにふるまったり、自己開示を控えるような表面的な関わりについての項目であった。このことから親友と同様、「表面的関係」と命名した。

また、信頼性の検討を行うため、因子分析後にクロンバックα係数を算出したところ、α係数は「内面的関係」が.88、「表面的関係」が.85であ

Table 1　親友との関係についての尺度因子分析結果（$N = 300$）

	項目内容	因子 Ⅰ	因子 Ⅱ
Ⅰ　内面的関係　$\alpha = .90$			
29	何でも話し合うことができる	.77	-.09
12	互いに励まし合うことができる	.75	.13
4	まじめな話ができる	.72	.08
23	相手にいつも関心を持つことができる	.70	.09
9	自分のことをよくわかってくれる	.67	-.10
24	いろいろな面で刺激を与えてくれる	.66	.16
7	隠し事をしなくてもよい	.65	-.23
19	互いに尊敬し合うことができる	.64	.03
22	嫌なことや悲しいことがあった時になぐさめてくれる	.62	.10
6	共通の思い出をたくさん作る	.62	.17
18	いつも自分に関心を持っていてくれる	.58	-.28
18	いつも自分に関心を持っていてくれる	.58	.01
11	自分の知らないことを教えてくれる	.52	.18
17	自分の嫌なところを見せることができる	.48	-.34
14	考え方や感じ方が似ている	.40	.05
Ⅱ　表面的関係　$\alpha = .80$			
15	相手と意見が対立しないように気をつける	-.29	.65
5	相手をがっかりさせないよう気をつける	.10	.64
13	相手に傷つけられないようにふるまう	-.11	.61
25	相手に心配かけないように気をつける	.06	.57
28	相手を傷つけないようにする	.29	.56
26	楽しい雰囲気になるようにふるまう	.10	.56
10	相手の気持ちに気を遣う	.24	.53
2	相手にどう見られているか気にする	-.25	.50
8	相手の内面に土足で踏み込まないようにする	-.02	.46
21	いつも一緒に行動する	.14	.36

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	-	.41
Ⅱ		-

り、内的一貫性が確認された。

依存性の自己評定質問紙の因子分析結果

依存性の自己評定質問紙39項目について因子分析を行った。因子負荷量の計算方法は最尤法とし、回転方法はプロマックス回転とした。その結果、先行研究通り3因子が抽出された。しかし、因子負荷量が.350以下の項目を除くため5回因子分析を繰り返し行い、最終的に35項目による3因子となった（Table 3）。

第1因子に含まれた12項目は「誰かに頼る立場になると落ち着かない」「自分のために人に何かをやってもらうのは苦手だ」など、人に依存することを拒否することについての項目であり、関（1982）の下位尺度と同じ項目で構成されていたため、同様に「依存の拒否」と命名した。

第2因子に含まれた13項目は、「重要な決心をする時は、いつも人の意見が聞きたい」「できることならいつも誰かと一緒にいたい」など、人に依存することへの願望についての項目であり、関（1982）の下位尺度と同じ項目で構成されていたため、同様に「依存欲求」と命名した。

第3因子に含まれた10項目は、「心のささえになってくれる人がいる」「自分と相手の立場を尊重しつつ、必要な時にはうまく頼ったり頼られたりする方だ」など、人に対して直接的な依存をしなくても安心したりでき、必要な時に依存することが適応的にできることについての項目であり、ほとんどが関（1982）の下位尺度と同じ項目で構成されていたため、同様に「統合された依存」と命名した。

また、信頼性の検討を行うため、因子分析後に

Table 2　友人との関係についての尺度因子分析結果（$N = 300$）

		項目内容	因子 Ⅰ	因子 Ⅱ
Ⅰ　内面的関係　$\alpha = .88$				
	9	自分のことをよくわかってくれる	.76	-.13
	29	何でも話し合うことができる	.72	-.20
	12	互いに励まし合うことができる	.72	.23
	4	まじめな話ができる	.69	-.05
	23	相手にいつも関心を持つことができる	.68	.13
	7	隠し事をしなくてもよい	.16	-.22
	19	互いに尊敬し合うことができる	.64	.16
	1	自分の率直な感情・態度を示すことができる	.64	-.21
	22	嫌なことや悲しいことがあった時なぐさめてくれる	.60	.22
	24	いろいろな面で刺激を与えてくれる	.60	.28
	17	自分の嫌なところを見せることができる	.59	-.24
	6	共通の思い出をたくさん作る	.59	.16
	18	いつも自分に関心を持っていてくれる	.59	-.07
	14	考え方や感じ方が似ている	.56	.02
	16	あたりさわりのない会話ですませる	-.50	.39
	3	趣味や好みが一致している	.41	.05
	11	自分の知らないことを教えてくれる	.40	.12
Ⅱ　表面的関係　$\alpha = .85$				
	28	相手を傷つけないようにする	.14	.72
	10	相手の気持ちに気を遣う	.07	.69
	5	相手をがっかりさせないよう気をつける	.10	.66
	26	楽しい雰囲気になるようにふるまう	.11	.65
	25	相手に心配かけないように気をつける	.15	.61
	15	相手と意見が対立しないように気をつける	-.12	.61
	2	相手にどう見られているか気にする	-.09	.59
	13	相手に傷つけられないようにふるまう	.02	.56
	27	自分の内面に踏み込まれないように気をつける	-.10	.50
	8	相手の内面に土足で踏み込まないようにする	-.15	.50
				.59

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	-	.30
Ⅱ		-

クロンバックα係数を算出したところ、α係数は「依存の拒否」が.88、「依存欲求」が.85、「統合された依存」が.85であり、内的一貫性が確認された。

本来感尺度の信頼性

伊藤・小玉（2005）に倣い、1因子構造としてクロンバックα係数を算出し、信頼性の検討を行ったところ、α係数は.82であり内的一貫性が確認された。

各変数の記述統計量

使用した各尺度について、下位尺度ごとの記述統計を算出した。友人関係についての尺度は、対象別に算出しており、親友・内面的関係は$M = 3.34$、$SD = 0.45$、親友・表面的関係は$M = 2.82$、$SD = 0.49$、友人・内面的関係は$M = 2.70$、$SD = 0.42$、友人・表面的関係は$M = 3.17$、$SD = 0.47$であった。依存性の下位尺度は、依存の拒否は$M = 2.86$、$SD = 0.74$、依存欲求は$M = 3.45$、$SD = 0.64$、統合された依存は$M = 3.87$、$SD = 0.64$であった。本来感尺度は$M = 3.12$、$SD = 0.75$であった。以上の結果から、全体の特徴として得点分布が高得点に偏っていることが示された。

友人関係のあり方と依存性と本来感の関連

それぞれの下位尺度と本来感の関連をみるために、友人関係の対象ごとの2つの下位尺度と依存

Table 3　依存性の自己評定質問紙因子分析結果（$N = 300$）

項目内容	因子 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ　依存の拒否　$\alpha = .88$			
22　誰かに頼る立場になると落ち着かない。	.73	-.01	.07
13　安心して人の世話になれない方だ。	.71	.00	.11
19　人の世話になるのは恥ずかしいと思う。	.70	.03	-.13
18　どんなに困った時でも、人に頼らない方だ。	.69	-.22	.09
30　自分のことは、どんなことがあっても自分一人でしないと気がすまない。	.68	-.08	.05
29　親しい間柄の人にでも、甘えることのない方だ。	.63	-.02	-.10
3　自分のために，人に何かやってもらうのは苦手だ。	.62	-.09	.09
25　友達には、絶対借りを作りたくない。	.57	.16	-.03
6　人に頼み事をするのはどんな時でも非常な決心がいる。	.57	.20	-.01
14　恩返しできないなら人に援助を求めるのためらわれる。	.55	.06	.12
26　自分のことを誰かに相談するのは、何か不安である。	.53	.07	-.27
34　好意を示されると、とまどうことが多い。	.40	.09	-.09
Ⅱ　依存欲求　$\alpha = .85$			
20　何かにつけて、誰かに味方になってもらいたい。	.04	.75	-.13
36　何か迷っているときには、誰かに「これでいいですか」と聞きたい。	.11	.70	-.08
38　困っている時や悲しい時には、誰かに気持ちをわかってもらいたい。	-.09	.67	-.01
33　重要な決心をする時は、いつも、人の意見が聞きたい。	.08	.63	.00
12　何かする時には、誰かに気を配って励ましてもらいたい。	.10	.61	.04
2　病気のときや，ゆううつな時には，誰かに同情してもらいたい。	-.19	.59	-.04
23　一人で決心がつきかねる時には、誰かの意見に従いたい。	.09	.55	-.22
28　人から「元気ですか」などと気を配ってもらいたい。	.09	.51	.06
32　できることなら、いつも誰かと一緒にいたい。	.05	.46	.14
5　むずかしい仕事をする時には，できたら誰かと一緒にしたい。	-.08	.43	.09
8　できることなら、どこへ行くにも誰かと一緒に行きたい。	.03	.41	.07
24　最後は自分で決めるにせよ、困った時には、信頼できる人の意見も求めてみる。	-.21	.39	.21
17　悪い知らせ、悲しい知らせなどを受け取る場合には、誰かに一緒にいてもらいたい。	-.01	.36	.22
Ⅲ　統合された依存　$\alpha = .85$			
37　心のささえになってくれる人がいる。	-.04	-.01	.78
15　自分を見守ってくれるように思う人がいるので、大事な場面も切り抜けられる。	.09	-.08	.77
7　思い出すだけで、心が安らかになる人がいるような人がいるので、落ち着いていられる。	.14	.04	.73
35　私がどんなことをしようと理解してくれる、と思う人がいる。	-.04	-.07	.72
4　自分の信頼できる人がいるので安心だ。	-.06	-.19	.70
10　誰かのことを思いうかべて、元気を出すことがある。	.26	.13	.57
39　自分と相手の立場を尊重しつつ、必要な時にはうまく頼ったり頼られたりする方だ。	-.12	.10	.44
27　人は、ささえ合って生きていくものだと感じる。	-.07	.26	.43
31　あの人になら少々無理を言ってもいい、と思う人がいる。	-.10	.09	.40
1　うれしいこと、楽しいことは、まず誰かに報告したい。	-.04	.34	.36

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	-	-.08	-.14
Ⅱ		-	.32
Ⅲ			-

性の３つの下位尺度と本来感の相関係数を算出した（Table 4）。その結果、親友・内面的関係（$r = .31$, $p<.01$）、友人・内面的関係（$r = .26$, $p<.01$）、統合された依存（$r = .45$, $p<.01$）は本来感との間で、弱い正の相関がみられた。また、親友・表面的関係（$r = -.16$, $p<.01$）、友人・表面的関係（$r = -.15$, $p<.01$）、依存の拒否（$r = -.19$, $p<.01$）、依存欲求（$r = -.13$, $p<.05$）は本来感との間で、弱い負の相関がみられた。

これらの結果から、内面的関係が高いと本来感は高くなり、表面的関係が高いと本来感が低くなるという関連があることと、統合された依存が高いと本来感は高く、依存の拒否や依存欲求が高いと本来感は低くなるという関連があることが明らかになった。

依存性下位尺度のクラスタ化とその平均値の差

依存性の下位尺度３因子の得点を元に階層的クラスタ分析を行ったところ、２つのクラスタが得られた（クラスタ１、クラスタ２）。２つのクラスタごとの依存性下位尺度3因子の平均値の差を比較するために、t 検定を用いて検討した。その結

Table 4　友人関係と依存性の下位尺度と本来感の相関係数（N＝300）

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
Ⅰ	親友・内面的関係	-		.06	.42**	.25**	-.13*	.26**	.61**	.31**
Ⅱ	親友・表面的関係		-		.20**	.51**	.24**	.32**	.06	-.16**
Ⅲ	友人・内面的関係			-		.10	.00	.19**	.31**	.26**
Ⅳ	友人・表面的関係				-		.21**	.25**	.14*	-.15**
Ⅴ	依存の拒否					-		-.42	-.12*	-.19**
Ⅵ	依存欲求								.37**	-.13*
Ⅶ	統合された依存									.45**
Ⅷ	本来感									-

**p<.01,　*p<.05

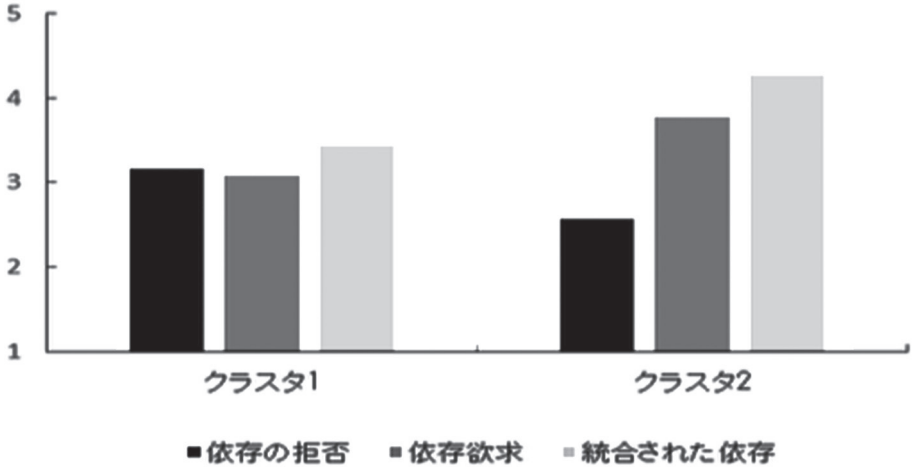

Figure 1　クラスタ別依存性下位尺度３因子の平均値

果をFigure 1に示す。２つのクラスタの依存性下位尺度3因子の平均値を比較した結果は以下の通りである。

「依存の拒否」平均値（M＝2.58、SD＝0.72）は、クラスタ１の平均値（M＝3.17、SD＝0.64）よりも有意に低かった（$t_{(298)}$＝7.46, p<.01）。「依存欲求」の平均値（M＝3.77、SD＝0.53）と「統合された依存」の平均値（M＝4.26、SD＝0.40）は、クラスタ１の平均値（M＝3.09、SD＝0.55、M＝3.44、SD＝0.57）よりは有意に高かった（$t_{(298)}$＝-10.95,p<.01、$t_{(253)}$＝-14.37, p<.01）。よって、クラスタ２の特徴は「依存の拒否」の因子得点が低く、「依存欲求」と「統合された依存」の因子得点が高いことであった。「統合された依存」の因子得点が有意に高く、「依存の拒否」の因子得点が有意に低いことから、「適応的な依存性」とする。

クラスタ２における友人関係のあり方と本来感の重回帰分析結果

本来感の得点を目的変数とし、親友・内面的関係、親友・表面的関係、友人・内面的関係、友人・表面的関係の得点を説明変数とする重回帰分析を行った。変数選択は、強制投入法を用いた。Table 5は重回帰分析の結果を示したものである。

その結果、説明率は10.0％であり有意であった

Table 5　クラスタ２における本来感を目的変数とした重回帰分析結果

説明変数	β	r
親友・内面的関係	.17†	.15*
親友・表面的関係	-.12	-.15*
友人・内面的関係	.14	.14*
友人・表面的関係	-.20*	-.18*
R^2	.10**	
$Adi.R^2$	.08**	
N	157	

β：標準偏回帰係数
**p<.01,　*p<.05,　†p<.10

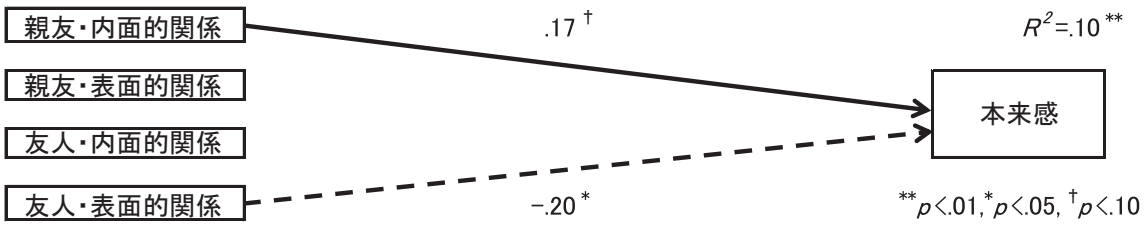

Figure 2　クラスタ 2 における本来感を目的変数とした重回帰分析結果

($F_{(4,152)}$ = 4.21, p<.01)。標準偏回帰係数をみると、親友・内面的関係（β = .17, p<.10)、からは有意傾向の正のパス、友人・表面的関係（β = -.20, p<.05）からは有意な負のパスが見られ、親友・表面的関係（β = -.12, *n.s.*)、友人・内面的関係（β = .14, *n.s.*）からは有意なパスが見られなかった。これらの結果をFigure 2に示した。

以上の結果から、クラスタ 2 において、友人関係のあり方から本来感へは10％しか影響していないことが明らかになった。その中でも、親友に対して内面的関係をもつことは本来感に正の影響を、友人に対して表面的関係であることは本来感に負の影響を与えることが明らかになった。

考　察

友人関係のあり方について

本研究では友人関係のあり方を測定するため、吉岡（2001）の友人関係測定尺度を内面的関係、岡田（2007）の友人関係尺度を表面的関係として抜粋し、組合せた尺度を対象別（親友・友人）に行った。親友を対象に内面的、表面的側面を捉えるため 2 因子を想定した因子分析の結果、25項目から 2 因子を抽出した（Table 1)。項目を見ると、内面的関係とした吉岡（2001）の項目である「いつも一緒に行動する」が、表面的関係とした岡田（2007）の項目に含まれていた。親友とは“親しい友人”で内面を開示するような関係であり、ある程度の信頼関係の元成り立っている。そのため、親友に対して「いつも一緒に行動」しなくても関係性は保たれると考えていることが推測される。また、対象別因子ごとの平均値を見ると、親友に対しては内面的関係、友人に対しては表面的関係を持つ傾向が高いことが示された。これらの結果から、落合・竹中（2004)、岡田（2007）などで述べられているような“現代の友人関係の希薄化”は、全ての友人に対して希薄化傾向があるわけではなく、親友に対しては西平（1973）が述べたような、内面を開示するような関係を持っていることが推測される。

友人関係のあり方と依存性と本来感の関連

本研究の目的は友人関係のあり方と依存性が心理的適応感に与える影響を検討することであるが、事前に因子間の関連を検討するため相関分析を行った（Table 6)。その結果、友人関係のあり方が内面的関係である人は、本来感が高くなることが示された。また、友人関係のあり方が表面的関係である人は、本来感が低くなることが示された。さらに、適応的な依存性である「統合された依存」が高くなると本来感は高くなり、不適応的な依存である「依存の拒否」や「依存欲求」が高くなると本来感が低くなることが示された。以上の結果から、友人関係のあり方が内面的関係であったり、適応的な依存性の傾向が高いと適応的であること、反対に友人関係のあり方が表面的であったり、不適応的な依存性の傾向が高いと不適応的であることが示唆された。これらは岡田（2007）や関（1982)、久米（2001）の結果に一致していた。また、対象関係なく内面的関係を取る人は、表面的関係も取り、適応的な依存性も高く、本来感も高くなる心理的適応感が高いことが考えられる。しかし、親友に対して表面的関係であると友人に対しても表面的関係を取っている傾向があり、依存をすることに拒否的で、本来感も低くなるため心理的適応感が低いことが考えられる。さらに見出された点として、従来考えられて来ているような内面的関係を取れる人は、誰に対しても内面的関係を取る場合と、相手によって内面的関係と表面的関係を切り替えていることが推測さ

れる。

友人関係のあり方と依存性が本来感に与える影響

友人関係のあり方と依存性を組み合わせ、本来感に与える影響を検討した。

依存性のクラスタ分析

友人関係のあり方と依存性を組み合わせるため、依存性の下位尺度3因子をクラスタ分析した。その結果、2つのクラスタが得られた。

クラスタ1は3因子全ての平均値が理論的中間点(3)に近い値であったため、適応的あるいは不適応的な特徴は見られなかった(Figure 1)。関(1982)はこのような群を“多くの矛盾を含んだ群”としており、解釈は出来ず不可解であるがなんらかの不適応につながると推測している。クラスタ2はクラスタ1と比べ「依存の拒否」が有意に低く、「依存欲求」「統合された依存」が有意に高かった(Figure 1)。関(1982)はこのような群を“女子の典型型で安定型”としており依存欲求の高さは女子の特徴であると述べている。以上のより、クラスタ1は矛盾を含んでいることから考察できないため、クラスタ2のみを“適応的な依存”の特徴をもつクラスタであると考え、考察していく。

“適応的な依存”のクラスタ2における友人関係のあり方が本来感に与える影響を検討するため、重回帰分析を行った(Figure 2)。その結果、“適応的な依存”の傾向がある群の友人関係のあり方が本来感へ与える影響は10％であった。その中でも、親友に対して内面的関係であることは正の影響を、友人に対して表面的関係であることは負の影響を与える事が明らかになった。以上の結果から、わずかな影響であるが、適応的な依存性を持ち親友に対して内面的関係をとることは心理的適応感を高め、適応的な依存性を持つが友人に対して表面的関係をとることは心理的適応感を低めることが示唆された。

総合的考察

本研究は、現代の女子大学生の友人関係のあり方と依存性が心理的適応感に与える影響を検討することを目的とした。以上の考察をまとめ、仮説を検証する。

まず、仮説1「友人関係のあり方において、内面的関係・表面的関係がともに取れて適応的な依存性の傾向が高い人は、心理的適応感を高める」を検証していく。親友に対して内面的関係を取り適応的な依存性の傾向が高い人は心理的適応感が高まるが、友人に対して表面的関係を取り適応的な依存性の傾向が高い人は心理的適応感を低めるため、内面的関係と表面的関係がともに取れて、という部分は支持されず、内面的関係を取ることのみが支持されたと言える。しかし、対象関係なく内面的関係を取る傾向が高い人は、表面的関係を取る傾向も高い上に、適応的な依存性の傾向も高く、心理的適応感も高いことも示されている。よって、因果関係としては内面的関係を取ることのみが支持されたが、内面的関係・表面的関係ともに取れることと適応的な依存性が高いことは、心理的適応感の高さと関連があるということが示された。

次に、仮説2「友人関係のあり方において、表面的関係のみを取り不適応的な依存性の傾向が高い人は、心理的適応感を低める」を検証していく。本研究のサンプルからは、表面的関係のみを取り不適応的な依存性の傾向が高い人の群はほとんどおらず抽出することができなかったため、因果関係は明らかにされなかった。しかし、親友に対して表面的関係をとる人は友人に対しても表面的関係をとる傾向が見出され、依存に対して拒否的であることから不適応的な依存性の傾向があり、心理的適応感も低いことが示された。よって、仮説1と同様に因果関係は示されなかったものの、表面的関係が高く不適応的な依存性の傾向が高いことは、心理的適応感の低さと関連があるということは示された。

以上より、最近指摘されている現代の友人関係の希薄化という問題は、全てがそうであるとは言い切れず、現代の女子大学生においては時と場合、相手によって内面的関係と表面的関係を使い分けながら、置かれている環境に適応していることが示唆された。また、そのように適応的に友人関係を築いていくためには、誰もが持っている依存性が、適応的な依存性を経て自立の方向へ発達していることが重要であることも示唆された。

今後の課題

本研究では同じ質問項目について親友と友人と対象を分けて回答を求めたが、特定の人物に限定せずに調査を行なったため、項目内容によって想定した対象が変化している可能性があり、同対象に対して内面的関係と表面的関係どちらも高いというような結果が出てしまった。誰か1人を思い浮かべた上で回答を求めることで一貫した関係のあり方が明らかになると考えられる。また、青年期の心理的適応感の適応指標に「本来感」を使用したが、友人関係のあり方や依存性との関連は示されたが因果関係はほとんど示されなかった。これは、「本来感」という概念自体が友人関係や依存性が成長因ではなく、他の様々な要因が成長因として存在することが考えられるため、他の心理的適応感を測定する概念を検討することが必要である。さらに、サンプル数が十分でなかったことで平均値が理論的中央値を超えてしまうような偏りのある集団であり、高低群の群分けが理論的中央値で分けることが困難であった。今後は様々な所属の協力者に対して調査を行う、ある学年について縦断的に検討を行うなど考慮する必要がある。

付　記

本論文は、第一著者が昭和女子大学大学院生活機構研究科に提出した修士論文（2017年度）の一部を加筆修正し、再構成したものである。

謝　辞

本調査にご協力頂きました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

Ausbel, D. P. (1954). *Theory and Problems of adolescent development*. New York: Grune & Stratton.

榎本 博明（2012）．青年心理学　おうふう心理学ライブラリー.

Guisinger, S. & Blatt, S. J. (1994). Individuality and relatedss:Evolution of a fundamental dialectic. *American Psychologist*, *49*, 104-111.

伊藤正哉・小玉正博（2005）．自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討　教育心理学研究，*53*，74-85.

伊藤正哉・小玉正博（2006）．大学生の主体的な自己形成を支える自尊感情の検討――本来感，自尊感情ならびにその随伴性に注目して――　教育心理学研究，*54*，222-232.

久米禎子（2001）．依存のあり方を通してみた青年期の友人関係――自己の安定性との関連から――　京都大学大学院教育学研究科紀要，*47*，488–499.

栗原　彬（1996）．やさしさの存在証明――若者と制度のインターフェイス――　増補新版　新曜社.

松井　豊（1990）．友人関係の機能　斎藤 耕二・菊池 章大（編）　社会化の心理学ハンドブック　川島書店.

西平直喜（1973）．青年心理学　塚田　毅（シリーズ編）現代心理学叢書7　共立出版.

落合良行・竹中一平（2004）．青年期の友人関係研究の展望――1985年以降の研究を対象として――　筑波心理学研究，*28*，55-67.

大平　健（1995）．やさしさの精神病理　岩波書店.

岡田　努（1995）．現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，*43*，354-363.

岡田　努（1999）．現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について　教育心理学研究，*47*，432-439.

岡田　努（2002）．友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究　金沢大学文学部論集　行動科学・哲学篇，*22*，1-38.

岡田　努（2007）．大学生における友人関係の類型と，適応及び自己の諸側面の発達の関連について　パーソナリティ研究，*15*，135-148.

小此木啓吾（1984）．現代青年への視覚――精神分析的青年論――　青年心理，*43*，156-176.

関知恵子（1982）．人格適応面からみた依存性の研究――自己像との関連において――　京都大学教育学部心理教育相談室 臨床心理事例研究，*9*，230-249.

千石　保（1991）．“まじめ”の崩壊：平成日本の若者たち　サイマル出版会.

千石　保・鐘ヶ江晴彦・佐藤郡衛（1987）．日本の中学生―国際比較でみる　日本放送出版協会.

高橋恵子（1968a）．依存性の発達的研究Ⅰ――大学生女子の依存性――　教育心理学研究，*16*，7-16.

高橋恵子（1968b）．依存性の発達的研究Ⅱ――大学生との比較における高校生女子の依存性――　教育心理学研究，*16*，216-226.

高橋恵子（1970）．依存性の発達的研究Ⅲ――大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性――　教育心理学研究，*18*，65-75.

高井範子（2008）．青年期における人間関係の悩みに関する検討　太成学院大学紀要，*10*，85-95.

竹澤みどり・小玉正博（2004）．青年期後期における依存性の適応観からの検討　教育心理学研究，*52*，310-319.

竹澤みどり・小玉正博（2006）．適応的な依存とは？：依存概念の再検討　筑波大学心理学研究，*31*，73-86.

上野行良・上瀬由美子・松井　豊・福富　護（1994）．青年期の交友関係における同調と心理的距離　教育心理学研究，*42*，21-28.

碓井真史（2000）．人間関係の心理　岡村一成・浮谷秀一（編）　青年心理学トゥデイ（pp. 115-130）福村出版.

吉岡和子（2001）．友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感　青年心理学研究，*13*，13-30.

いとう　かなこ（医療法人社団仁恕会　メンタルクリニックいたばし）
うかい　けいこ（昭和女子大学心理学科）